

本書を読み終えて真っ先に思い起されたのは、「歴史の屑拾い」を自任した哲学者ベンヤミンの「だが、ボロ、屑―それらの目録を作るのではなく、ただ唯一可能なやり方でそれらに正当な位置を与えたいのだ。つまり、そのやり方とはそれらを用いることだ」という断章である。

著者は食と農の思想史を専門とする研究者だが、農業史を基盤に科学知と人文知を自在に往還しつつ、既存の人間観さらには自然観を鮮やかに転倒する。

本書を貫くキーワードは「分解」、すなわち「動植物の遺体、排出物、人工的産物などの有機物が微生物の作用によってより簡単な化合物に変ること」(『生態学辞典』)である。この分解の働きがなければ生態系、地球上の生命体を軸とする物質循環は成り立たない。生命にとって腐敗・分解・

藤原 辰史著

# 物質循環断った現代に警鐘

崩壊はごく当たり前の現象であり、「人間は、死ねば、個体として分解され、土に還る」のである。ところが人間社会は「落穂拾い、

剤、使用済み核燃料など」土に還らない物質が大量生産・大量消費・大量廃棄されるにいたった。

いわゆる環境問題とは、物質循環の回路を断ち切り「腐敗機能を弱体化させてきた」帰結にほかならない。プラスチックごみによる

深刻な海洋汚染は、その象徴とも言つべき事態である。以上のような課題を前に、著者

はネグリとハートの『帝国』論(第1章)、フレイベルの幼児教育論(第2章)、チャペックの未来小説(第3章)、蟻の街のメリア(第4章)、ファーブルの糞虫観察(第5章)と手を交え、品を変えては「分解」の諸相を描き出す。それらの万華鏡を築きつつ、読者は「人間社会によって滓なり糞なり塵なり埃なりと名づけられる」ものこそ地下の分解世界を支える要

藤原辰史



分解の哲学 藤原辰史著

(青土社・2400円) 76年専攻教授。思想史、世界史、農業史、食の文化史、食の歴史など。著書に『トウモロコシの歴史』『給食の歴史』など。

「哲学と自然科学と生態学を結びつける」という企図は、本書において分解の博物学(自然史)となつて実現されたと言つてよい。

《評》東北大学名誉教授 野家 啓一

読 書